

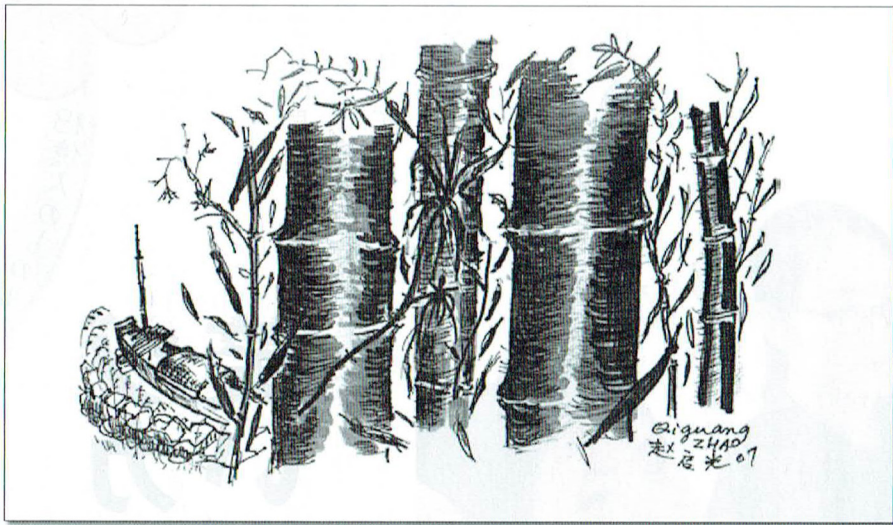
無為

（本編第5章より）

無為というのは消極的になつて何もしないことではなく、いつ動き、いつ手を引くべきかを知ること。

無為というのはタオイズムの基本哲学である。「無」とは「ない」「しない」「為」とは「なす」「する」と考えればよい。字面からすれば無為とは「しない」「動きがない」ということになる。なぜ無為なのか。もしいつさい何もするなと言うのなら、我々はいったいどうすればよいのか。

「そこで聖人は、無為ということによつてものごとに対処し、不言ということによつて教え導き、万物が生長変化するのにまかせただけでその始まりを代わってやろうとはせず、万物を生み育てながらそれを自分のものだとはせず、万物を動かしながら自分のせいだとはせず、功業が成就しても満足しない。まさに功業に満足しないからこそ、かれの功績は失われることがなくなる」（訳注）。無理に何かを求めたりはせず、しかるべき時にしかるべきことをする、そうすれば成功の門が開か



習慣とはこのように自然でおだやかだ。岸の竹、ただよう小舟、空をすべる雲のように。

無為とは自然に従うこと、悩みという鎖から自由になり、何でもかんでも自分の目標に結びつけて考えることをやめることだ。これはすなわち、肩の力をぬいて、道のりはゴールよりもすばらしいと知ることでもある。

無為を自分の人生の習慣にしてしまおう。習慣にしてしまえば、つねに絶え間なく何かを決める必要はなくなる。今すぐ起きるか、それとも七時半に起きるか。たばこを吸うかどうか。樂觀主義者になるか、悲觀主義者になるか。ひとたび無為の習慣を身につけてしまえば、毎時、毎日、毎週、毎年、なにかの選択に迫られるという煩わしさから解放される。すべての問題を解決しつくす必要もなくなるし、「する」と「しない」で悩むこともなくなる。良い習慣は七つ、七十、七百、七百万といくらでも身につけた方がよい。そうすれば毎回いちから悩む必要はなくなる。無為の習慣があれば

れる。宇宙はそれ自体の法則でうまく回っている、なのに人間はこの世界に自分の考えを強引におしつけるから調和を壊してしまう、とタオイズトは考える。これは自分の意志を行動に反映させるなど言っているわけではない。自然の流れの中で、「何を」「いつ」「どのように」するかを知ることである。

また無為は、放任主義、あるいは無理に作りだした安定と解釈されてきた。無為は何もしない怠け者になることでも、ものを考えない愚か者になることでもない。むしろ、自然の流れに従おうと鋭敏になること、決意することだ。無為を理解するための一つの方法は老子の政治思想を知ることだ。政治は小魚を煮るようなもので、あまりにひっくり返すすぎると身が崩れてしまう。

学問をしていれば日一日と増えていく。道にしたがつていけば日一日と減っていく。道減らしに減らしていくとついに無為にいたる。無為とはいうものの、どんなことがらもそのの働きである。天下を統治するには、つねに無理をしてはいけない。もし無理をしてやれば、天下を統治する資格はない。

（『道徳経』第四十八章）

学ぶとは吸収することだが、タオイズトはそれを手放せと言う。赤ん坊のころから人は多くのことを学び、学ぶことで独り立ちする。そして富や名声など、つまらないことで悩む。これに対し、はじめの状態に立ち戻り、赤ん坊のように悩みを忘



チーグアン・ジャオ 北京出身。カールトン・カレッジ教授、同済大学特別招聘教授、清華大学客員研究員などを歴任。中国社会科学院大学院で英米文学修士号、マサチューセッツ大学で比較文学博士号取得。著作に「A Study of Dragon, East and West」、「Do Nothing & Do Everything」、「古道新理」、「老子的智慧」、「世路心程」、「客舟聽雨」、「コンラッド小説選」など。2015年3月、マイアミでの遊泳中の事故により永眠。ミネソタ州の「スタートリビューン」紙で「北極オーロラの星」と評価された。

町田晶 日中翻訳学院修了。東北大学文学部東洋日本美術史専攻、東北大学大学院文学研究科中国哲学専攻。学生時代の一人旅で中国文化の奥深さと中国人の温かさに触れたことから本格的に中国語を学ぶ。翻訳得意分野は思想、哲学、文学、食文化等。

ば、問題のないところに波風を立てることもない。小鳥はなんの苦勞もせずに青い空を飛んでいるように見えるが、実は百以上の筋肉を動かしている。しかし小鳥はどう動くかをいちいち考えているわけではない。習慣とはこのように自然でおだやかだ。岸の竹、ただよう小舟、空をすべる雲のように。

無為はよく誤解を受ける。今の中国で誰かに自分分はタオイズトだなどと言うものなら、「ああ、あの無為の哲学ね。なんでそんな怠け者の哲学を信じるの」と言われるだろう。実は無為というのは消極的になつて何もしないことではなく、いつ動き、いつ手を引くべきかを知ること、これは無為のパラドックスにおいても同じことが言える。無為の目標は道とひとつになった自然な状態にいたることであり、さらには目には見えないすばらしい力を入れることである。

無為を選ぶということは自分を空っぽにすること、波を乗り越え猛進するのではなく流れにのって悠々と進むことだ。無為とは何もしないことではなく、ものが前進する自然の法則を止めてしまうことでもない。自然のままに争わず、無理をせず、またあらゆる変化を拒まないことだ。水のように、また空っぽの壺のように、名まえもなく形もなく無為である。我々は宇宙が投じて来る試験を受け入れなくてはならない。同時に、目標を実現しながら空っぽな自分を受け入れること、やらなければならぬことをすべて成し遂げることができるのだ。

訳注 『道徳経』第2章



「パンを手に入れることはもとより大事だが、その美味しさを楽しむことはもっと大事だ」
比較文化学者であるチーグアン・ジャオ氏が、身近な例から老子の人生哲学をわかりやすく解説した一冊。「よりよい老後」のために心身ともに無理を重ねる現代人に向け、老子の教えをもとに、肩の力を抜いて自然に生きることを勧める。
2016年4月、日本僑報社刊